

令和 4年度 自己評価書

学校園名 附属竹早中学校

1 学校経営計画
別紙のとおり。

2 自己評価

領域	重点目標・具体的取組	達成状況・成果と課題	評価	今後の改善方針	学校関係者評価を踏まえた今後の改善方針
学校運営	<p>①新型コロナウイルス感染症対策をとる中で、生徒と教職員の感染防止に最大限努めながら、工夫して生徒の学習と活動を進める。</p> <p>②東京学芸大学が進める「子どもの社会資源格差を乗り越える教育協働システムに関するコンソーシアム型研究開発プロジェクト」に参画し、多様性に関わった附属学校モデル作成に協力するとともに、その成果を活かす。</p> <p>③企業、大学、竹早地区教員による「未来の学校みんなで創ろう。プロジェクト」を推進する。</p> <p>④オンラインでの情報発信を充実させ、本校の特色や研究成果を的確に発信する。</p>	<p>①ほぼ隔週で開催するコロナ対策委員会を中心に学校全体の方針を協議した。基本的な感染対策を堅持し、明らかな校内感染は見られなかった。一方で消毒の簡略化なども進め、授業中の活動や行事などの制限を徐々に緩和することができた。</p> <p>②大学やSSWとの連携のもと、特別連絡進学生の最終年度で最後の3年生が卒業し進学することができた。成果をとりまとめた書籍が準備中である。このプロジェクトの成果は、特別な支援を要する生徒や困難な家庭環境にある生徒の支援や指導に活かされている。</p> <p>③数学室が企業との連携でICT環境の整ったSUGOI部屋に整備され、様々な授業に活用されている。1月に公開研究会を開催した。300名を超える参加者があり、9つのチームの研究成果を共有するとともに、有意義な交流の場となった。</p> <p>④学校案内、未来の学校の成果などのオンラインでの発信はかなり定着した。文化研究発表研究会や合唱コンクールでも動画配信が一部行われた。ホームページの充実については、あまり進捗がなかった。</p>	B	<p>① 学校行事や放課後の活動を感染対策と両立させながら活動の枠をひろげていく。異校種交流、宿泊を伴う行事の実施と保護者への公開を進めていくことが課題である。</p> <p>② 成果を従来の校内支援体制の充実に活かすとともに、地域連携にも取り入れる。</p> <p>③ 企業と連携して継続していくテーマを精選するとともに、今まで得られた成果の実装化を図る。</p> <p>④ 保護者からの要望に応えるとともに、受験生を増やすためにも、オンラインでの情報発信を今まで以上に推進する。</p>	<p>コロナ対策をとりつつ、竹早中学校らしい授業や行事を進める。保護者や外部へのオンラインも用いた公開を拡大する。</p> <p>SNSによるいじめ案件も増えており、早期発見・早期対応に努めるとともに、予防的指導も進める。</p> <p>一方で、教員の多忙化を緩和することは急務であり、業務を精選するとともに、可能な範囲で多職種協働を進めていく。</p>

	<p>⑤働き方に関する問題意識を高め、具体的な対応を検討するとともに、研究に意欲の持てる環境作りに努める。</p> <p>⑥生徒が教員を信頼して相談し、指導を受けることができる関係性の構築をより一層確かなものにし、保護者と学校とのより良い信頼関係を構築する。</p> <p>⑦生徒一人一人の状況を見取り、変化を示すわずかなサインを見逃さないように努める。</p> <p>⑧いじめを起こさないような体制作りを行い、いじめが起こった場合には学校全体で対応し、指導する。</p>	<p>⑤業務改善を検討したが、コロナ対策や生徒指導の業務も増え、教員にとって負担増の状況が続いている。オンライン活用などで情報共有については若干の改善はあったがまだ十分成果が上がっているとはいえない。</p> <p>⑥学級担任と生徒との面談を中心に、問題が起こった時には学年の教員が協力して対応に当たった。必要に応じて管理職、指導部、養護教諭、SC、SSWとの協力態勢を作るなど、生徒の状況に迅速に対応する体制は基本的にできている。保護者との信頼関係は基本的にはできているが、学校の様子を直接見る場が限られており、個別の案件で丁寧な対応が求められている。</p> <p>⑦運営委員会を中心に教員間の連携をとる体制作りを進めてきた。特別に支援を必要とする生徒についての理解や情報共有も進んだ。</p> <p>⑧いじめ研修や指導主事研修（都、区、大学主催）に参加し、資質向上に努めた。SNS上からかいが深刻化するケースが複数あり、重大事態に至った案件が一件あった。</p>		<p>⑤現場の実情に合わせた勤務時間の短縮について、具体的な検討を行う。</p> <p>⑥生徒の些細な変化の見取りと共有化を一層進める。近年、児童相談所や子ども家庭支援センター関係の案件が増えており、組織間での情報共有や連携の進め方が複雑化している。SSWやスクールロイヤーのアドバイスを受けつつ、個別の対応を進める。</p> <p>⑦特別な支援を必要とする場合や、家庭の困難な状況を抱えている場合の多職種連携のチームによる生徒指導について、教員が学べる場を作る。</p> <p>⑧生徒観察を丁寧に行うとともに、加害者側に同調しない、被害者を守る生徒、生徒集団を育成するための指導をさらに充実させる。</p>	
<p>教育活動</p>	<p>①幼小中連携教育の一層の充実の元に、他者への理解を深め、多様性を尊重し、互いを高め合う姿勢を育む教育の実践を目指す。</p> <p>②さまざまなことに興味を持ち、主体的に学ぶ態度を育成する。</p>	<p>①本校で重点的に取り組んだ多様性の教育の研究成果に基づき、教科教育に加えて道徳などにおいて、他者理解や多様性の尊重を学ぶ特徴ある授業を進めた。</p> <p>②連携研究の成果を生かした主体性を育む授業を進めた。また、生徒の希望に基づくDプロジェクトを開始し、成果をあげた。</p>	<p>A</p>	<p>①昨年度出版した書籍の成果を生かした活動を進める。</p> <p>②Dプロジェクトの継続発展に努める。</p>	<p>若手教員が増え、教科指導や生徒指導の面での能力向上が課題となっている。校内の研修や研究会に加えて、附属学校関係や地域、行政、学会など様々な形で自己研鑽ができるよう環境整備に努める。 学習支援や特別な支援を必</p>

<p>③主体的に判断行動し、自己を律する力を育成する。</p> <p>④日常生活の基本的な生活習慣および感染防止の基本的習慣を身につけさせる。</p> <p>⑤公共心や奉仕的態度を育成する。</p> <p>⑥総合的学習（自由研究・卒業研究）を通して継続して考察し、探究する態度を養う。</p> <p>⑦部活動・委員会活動を通して生徒の思考・判断能力を高める。</p> <p>⑧運動会、文化研究発表会、合唱コンクールの行事等において集団で協力して作品を作り出す喜びを体験させ、他者との協調、関わりを持てる生徒を育てる。</p> <p>⑨進路を人生と向き合うことのひとつと捉えさせ、各学年における進路指導を適切に行う。</p> <p>⑩地域の方々と共に生活している意識を育む。</p> <p>⑪GIGA端末について使い方に気を付けて活用を進</p>	<p>③再開された集団活動や学校行事の主体的な運営をかなり実践できるようになってきた。</p> <p>④黙食やマスク着用、消毒など基本的な感染対策について、習慣化してきた。また、挨拶をすることなども全生徒に指導した。</p> <p>⑤登下校時の行動の仕方について、たびたびクレームが届き、年間を通じて継続的に指導を行った。周辺の地域清掃も復活させた。</p> <p>⑥多くの生徒が時間をかけてじっくりと研究に取り組み、質の高い内容を文化研究発表会で発表できた。全国レベルのコンテストで入賞した発表もあった。</p> <p>⑦放課後の時間が短い、多くの生徒が熱心に取り組んだ。生徒会活動としては、制服に性別の差をなくすなどの改革を行った。</p> <p>⑧運動会は規模を縮小したが3学年全員で実施、文化研究発表会も展示を中心にフルに行い、合唱コンクールも実施できた。生徒たちの自主的な運営も見られた。</p> <p>⑨各学年の段階に応じた進路指導を実施している。同窓生をはじめ職業人と触れ合う場面を従来以上に設定した。</p> <p>⑩コロナ禍で中止していた学校周囲の清掃を再開した。周辺5町会長との連絡協議会は開催できなかったが、学校評議員に地元の町会長に就任いただき、意見交換ができた。</p> <p>⑪授業や様々な活動において有効に使われ</p>	<p>③感染防止対策をとりつつ生徒たちの意見交換や議論ができるような場を確保するよう努める。</p> <p>④一つ一つの行動の意味を理解させ、指導を継続していくことが大切である。</p> <p>⑤登下校時のマナーは気を付けさせる。私服選択も可能とする服装指導も行う。</p> <p>⑥引き続ききめ細かい個別指導を行っていく。</p> <p>⑦感染防止対策の充実を図りつつ、可能な活動を増やしていく。</p> <p>⑧運動会、文化研究発表会ともに、感染防止に努めつつ、生徒全体で取り組めるよう開催形態などを工夫するとともに、保護者への公開を進める。</p> <p>⑨「未来の学校みんなで創ろう。プロジェクト」の成果も生かして丁寧に指導する。</p> <p>⑩音の問題や登下校時のマナーなどは周辺町会長の理解は得ているが、意見交換の場を設けていく。</p> <p>⑪SNSの使用法などを保護者と協力し</p>	<p>要とする生徒へ配慮した教育をできるよう体制の構築を進める。</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------

	める。	ているが、休み時間中の使い方などに注意が必要である。GIGA端末を用いての不正行為は少ないが自分の端末を用いてのSNSのトラブルは多く発生した。		て改善していく必要がある。	
研究活動	<p>①幼少中連携教育・研究について、7期の「学びを深める場を作る」を活かした実践を行うとともに、昨年度開始した8期の「未来の学校をみんなで創る」に取り組む。</p> <p>②その成果を書籍にまとめた「多様性の教育」の研究を継続するとともに新たなテーマを立ち上げる。</p> <p>③GSPの特別連絡進学生について、SSWを含めた校内支援体制を大学と連携しながら充実させるとともに、研究的にも深めて書籍化する。特別連絡進学生の高校進学に向けた生活や学習の支援を充実させるとともに、その成果を活かす。</p>	<p>①幼小中連携研究第7期の「学びを深める場をつくる」に一区切りをつけ、「未来の学校みんなで創ろう。プロジェクト」に一本化した。9のチームごとに民間企業も入れて研究を実施し、1月に3年ぶりに対面で公開研究会を実施し、盛会となった。</p> <p>②未来の学校プロジェクトや多様性の研究の成果を引き継いで生徒の夢を実現させるDプロジェクトを立ち上げ、3件が実施され、成果をあげた。</p> <p>③生徒個別のケース会議と定期的な大学とのCCSS委員会を軸に、情報共有と研究を進め、成果の書籍化を目指して取り組んだ。ケース会議にはSSWや居住地域の関係者も参加し多職種連携の支援体制を構築した。</p>	A	<p>①「未来の学校みんなで創ろう。プロジェクト」の具体的進展を図るとともに、授業実践などに生かしていく。</p> <p>②書籍に書かれた成果を実践に生かすとともに、新たな学校研究のテーマを立ち上げる。</p> <p>③これまでの成果を書籍化する。</p>	「未来の学校みんなで創ろう。プロジェクト」の成果を生かし、企業や教育後援会と連携して教育環境の整備を進める。研究成果の公表や宣伝にも力をいれる。
学生の教育・支援活動	<p>①学生が教育実習の経験の中で、自身の教職志向や適性を高めていけるような指導を実施する。</p> <p>②教科に関する知識理解の徹底と実践的能力の向上を目指す。</p> <p>③生徒が主体的に参加することができる授業実践のために的確な事前事後の指導を行う。</p>	<p>①感染症感染対策に努めつつ、生徒と接触できる場面を昨年より増やすことができた。</p> <p>②中学校の教科指導における知識理解が充分ではない者も、授業実践を重ねることで、教材研究で知識を深め、指導法における能力の獲得に向けた取り組みが行われた。</p> <p>③事前事後の授業考察を通して、ポイントとなる箇所を改めて討論し、各自が提案するなどの前向きな姿が見られた。</p>	A	<p>①教科指導だけでない体験も積ませる。</p> <p>②教材研究の意義を事前に実習生に指導する必要がある。</p> <p>③実習生同士で積極的に討論を行い、互いに高めあうような環境を作る。</p>	新型コロナウイルス感染症による制限の緩和を受け、生徒との交流や実習生同士の討論など活動を広げていく。

	<p>④現在の教育現場の諸問題に適応できるような指導を行う。</p> <p>⑤実習生と共に討論し考察して教科及び学習に関する考察と理解を深化させる。</p> <p>⑥実践の記録、調査、分析、生徒指導のあり方など基本的な指導に関する情報の提供を行う。</p> <p>⑦授業の目的とその効果的な手段の工夫のあり方を検討する。</p>	<p>④学級経営については、課題を出して実習生に議論させる場を設けた。</p> <p>⑤授業後には実習生全員で授業考察を行うなど、成果や問題点を共有化し、次に繋げる試みが導き出せた。</p> <p>⑥授業の後での授業者としての振り返りを行い、また教科内で実習生と教科教員で成果と課題を共有し、情報交換や助言を行う機会を確保した。オンラインの実習ノートが有効であった。</p> <p>⑦指導案の作成指導を丁寧に行い、実習生もそれに応えて工夫を行った。</p>		<p>④学級経営について、実習生の相互討論や担当教員の話聞くことで、現場感覚を持ってもらうよう努める。</p> <p>⑤実習生同士の討論の場を作るように努める。</p> <p>⑥授業者の実践を実習生同士が共有できるように努める。</p> <p>⑦丁寧な指導案作りを徹底させる。</p>	
社会 貢献 活動	<p>①「地域のモデル校」「地域の研究拠点校」としての役割を果たしていく。文京区合同校舎長会に出席するとともに、文京区教育研究会を通じた相互交流を実施し、地域の中学校に貢献する。</p> <p>②全国組織の学会、研究会に所属し、実践研究活動を行う。</p> <p>③教科書の編集、執筆</p> <p>④国際交流活動等への積極的な参加</p>	<p>①文京区合同校舎長会に原則として毎月出席し、文京区の情報を得るとともに「未来の学校みんなで創ろう。プロジェクト」について紹介して参加を促した。また、文京区教育研究会とはコロナ禍で残念ながら交流の機会が限られた。</p> <p>②コロナ禍で学会の開催は少なかったが、学会誌での論文発表のほか、委員や研修講師の委嘱で外部機関に協力した。</p> <p>③複数の教員が教科書の編集や執筆に関わった。</p> <p>④コロナ禍でほとんど交流の機会がなかった。</p>	B	<p>①引き続き文京区の合同校舎長会、指導部協議会、文京区教育研究会などに参加し、情報収集を行うとともに地域連携の芽を作るように努める。</p> <p>②研究活動やその成果発表が行いやすい、また、外部からの講師や委員の委嘱を受けやすい環境を整える。</p> <p>③多くの教員が関わるができるように環境整備に努める。</p> <p>④新型コロナウイルスの影響で国際交流について先行きが見えないが、積極的に交流を進める。</p>	CCSSの成果をはじめ、今までの学校研究の成果を地域貢献につなげていく取り組みが必要である。

3 その他特記事項

2022年度学校アンケート調査（第3学年の生徒と保護者）の結果をまとめる。保護者生徒とも、「竹早中学校に入学してよかったと思っている」「学校へ行くのが楽しい」という項目について肯定的な評価が多く、総合的には生徒・保護者からは引き続き高い評価を受けていると考えられる。そのほかに、卒業研究や自由研究への取り組みや、安全管理や健康管理に関連する項目で肯定的な評価が高い。「校則や生活上のきまりは、無理のないものになっている」という項目も肯定的な評価を得ている。

一方で、校外学習や部活動への取り組みについては、学校行事が従来のようにできなかったため肯定的評価が少なく、自由記述にもそれに関連する記述が多くみられた。近年の傾向として、教科学習に関連する項目について、相対的に肯定的な評価が少なくなっているが、今回についてもその傾向が続いている。特に、「生徒は、授業が楽しくて分かりやすいと思っている。」「教科の指導では、より高いレベルを目指す生徒への対応もとられている。」「子ども一人ひとりの興味・関心に答える教育内容が用意されている。」などの項目については、肯定的評価が少なくなっている。この点についてもコロナ禍で特色ある教育活動がなかなかできなかったことも影響していると思われるが、授業の質の向上の必要性が改めて浮き彫りとなったと言える。また、生徒アンケートで「学校は、心の教育にも力を入れて取り組んでいる。」の項目で肯定的評価が少ないことも、いじめ案件などと関係して今後の課題と言える。

全体として保護者の肯定的評価が10ポイント程度低くなっているが、コロナ禍で学校の様子を見る機会が制限されていることが大きく影響されていると考えられる。次年度は保護者への学校公開を進める必要性を示している。

4 自己評価委員会 開催 2023年4月14日

